



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

# 関西元気企業

～ 誰もやらないなら自分でやろう ～

和歌山県有田川町出身の釜中社長が設立した紀州技研工業株式会社は、段ボール等に文字やバーコード等を印字する物流業界では欠かすことのできない産業用インクジェットプリンタを開発・販売しており、今では業界トップメーカーにまで成長しています。

今回は、釜中社長に設立当時のことや今後の展望等についてお話を伺いました。

## 企業情報

名称 紀州技研工業 株式会社  
所在地 和歌山県和歌山市布引 466 番地  
設立 昭和 43 年  
代表者 釜中 甫干  
従業員 177 名 資本金 1,000 万円  
H P <http://www.kishugiken.co.jp/>

## ● 紀州技研工業(株)を設立した経緯をお聞かせください。

もともとは、和歌山県内にある大手化成品会社の工場  
で、パッケージ関係の機械設備担当をしていました。

その当時は、増産に次ぐ増産の高度経済成長期だったので、少しでも効率的に処理できるようにパッケージ機械の改良等に取り組んでいましたが、出荷時に段ボールへ製造年月日や製造番号等を押印する作業は、ひとつひとつ手作業で行うのが一般的でした。一日に数えきれないほどのスタンプを押さなければならないので、腕も疲れてきますし、単調な繰り返しでとても忍耐力のいる作業でした。

そんな中、機械設備の技術者だった私は、この大変な押印作業を自動化できるアイデアを考え、図面に起こしてみたり、印刷業者や包装業者に相談したりしましたが、開発の依頼に応じてくれる企業はどこにもありませんでした。確かに、売れるか売れないか分からない商品でしたし、そんなリスクに挑戦する企業がなかったのも当然だったかもしれません。

しかし、私はその時に、きっと需要はあるはずという強い信念があったので、「誰もやらないなら自分でやろう」と一大決意をしたわけです。それに手に職をつけて独立してこそ「一人前」という私自身の考えも、一歩先へ踏み出す大きな力になりました。



紀州技研工業 株式会社

代表取締役社長 釜中 甫干 氏

## ● 設立当時の逸話（苦労話）があればお聞かせください。

設立当時は、夫婦二人でスタートしましたので、最初の 1 年半ぐらいは休みなしで働き、設計から開発、営業に至るまで、あらゆる仕事をやっていました。それでも、私自身は仕事に集中して取り組んでいましたので、大変だとか苦労したという思いはありませんでした。

そして試行錯誤の末、ベルトコンベアで流れてくる段ボールにゴム印を当てた時の摩擦で、そのゴム印自体が回転して自動で日付等をスタンプできるメカニズムを備えた自動捺印機「PC コーダー」の第 1 号が完成したわけです。

さっそくチラシを作って、最初の営業で 100 社ぐらいに声をかけたところ、そのうち 8 社ぐらいから返事がありました。その中に、捺印の自動化に関心のあった大手食品会社からの商談があり、それが契約第 1 号となったわけです。その会社に対しては思い入れも強く、今でも買い物をする時はその食品会社の商品を買っています。

## ● 『可食性インク』を開発したきっかけをお聞かせください。

生卵による食中毒が問題になっていた時期、直接卵に賞味期限を表示できれば、食の安全につながるのではないかと考えました。

食品に直接印字するので、口に入れても問題のないものを開発する必要があったわけです。完成した製品は、卵の内部まで浸透することではなく、ゆで卵にしても表示が消えることはありません。

また、可食性インクを始めとする消耗品のインクを自社で開発・製造・販売することによって、収益が安定するといったメリットもありました。今では、全体に占める消耗品部門の売上は半分を占めるほどになっています。



## ● PE（プリンティッド・エレクトロニクス）開発部設立の経緯をお聞かせください。

インクの可能性を探っている中で、数年前に海外で開催された半導体機器展示会で、太陽電池パネルの配線をインクジェットプリンタで描くという情報に触れる機会がありました。

そこで、これまで当社が培ってきたインクジェットの技術を活用し、新たな市場を開拓することを目指して、PE 開発部を設立しました。この分野は、今後著しい成長が見込まれることから、私自身も大きな期待を寄せています。

PE 開発部では、実際に太陽電池パネル用の配線を描くための技術開発を進めており、技術力は業界トップクラスという自信を持って、研究・開発に取り組んでいます。



● 今後の展望をお聞かせください。

昨年末に発売した「銀ナノ粒子インク」を始めとする PE 事業をさらに展開して、次は金属ナノ粒子インク専用のインクジェットプリンタを開発しているところです。

これらの新製品や新技術を活用した研究・開発が幅広く行われれば、今後様々な用途で当社製品が利用されることになるものと期待しています。

当社では、既存の技術を活かしつつ、「次世代」を見据えた新たな分野への挑戦を今後とも続けていきます。

<取材後記>

「リスクを恐れず挑戦する」、とても素晴らしい経営理念だと思う。

でも、リスクのあることに向かっていくなんで本当は誰もやりたくはないはず。今の時代もそうであるのに、高度経済成長の時代にあえてリスクを恐れず挑戦した釜中社長。「誰もやらなければ自分でやる」という、今も変わらぬ社長の行動力には、ただ驚かされるばかりである。

今回の取材をとおして、現状に満足することなく、常に新しいことにチャレンジする姿勢が、会社を成長させる大きな力になるということを改めて実感した。

掲載している情報は、平成 25 年 3 月時点のものです。